朝比奈大作　監修

司書教諭テキストシリーズⅡ…2

学校図書館メディアの構成

［編集］小田 光宏
今井 福司
高橋 知尚
庭井 史絵
村上 泰子

樹村房

監修者の言葉

本シリーズは2002年から刊行されてきた「司書教諭テキストシリーズ」の改訂版に相当するものである。1998(平成10)年に学校図書館司書教諭講習規定の内容が大幅に改訂され，これを受ける形で旧版が編集・刊行されたのであるが，それからすでに十余年が経過し，学校図書館を取り巻く状況にも大きな変化が見られる。とりわけ，2008(平成20)年からのいわゆる新学習指導要領には「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り，児童の主体的・意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」（傍点筆者）という文言が盛り込まれており，学校図書館と司書教諭との責任はより大きなものとなっている。

一方では，いわゆるスマートフォンの普及に見られるように，情報化の進展は止まるところを知らず，むしろさらにその進展の度を増しているように見える。ここではあえて「情報化」が何を意味しているのか，その定義についてはふれずにおくが，「情報」と「知識」とは大きく重なり合う概念であることは間違いがない。そしてまた「知識の獲得」が私たちの教育・学習活動の主要な部分であることも言うまでもないことであろう。とするならば，私たちを取り巻く情報環境が大きく変化している以上，それに伴って私たちの教育・学習の在り方も大きな変革を余儀なくされるはずである。当然に学校教育そのものの在り方についても，より真摯な再点検が行われなければなるまい。上記の新学習指導要領の文言にもこのことは反映されていると言える。

こうした状況をふまえて，旧版を全面的に改訂しようということがこの「司書教諭テキストシリーズⅡ」の趣旨である。旧シリーズと同様に，最新の図書館情報学の知見を教育学的な視点から解説し，理論と実践との融合を図るという方針に変わりはないが，比較的に若手の著者に執筆を依頼した。「古い革袋に新しい酒を入れる」ことが必要であろうと思われたからである。

残念ながら，一般的な学校教育の現場においては，「学校図書館の機能の活用を図る」ことについても，情報化の進展に伴う学校教育の変革の必要性につ

いても，必ずしも十分な理解が得られているとは言えない。それなりの法整備は進められてはいても，教育の現場における実践活動は旧態依然の状態に置かれたままであるようにも感じられる。このギャップを埋めるためには，図書館情報学の知識や技術を暗記的に身に付けていくことよりは，これらの知識・技術を教育現場の中でいかに活用すべきか，あるいは活用できるのか，ということについて，理念的に考えてみることが必要であろう。本シリーズではそのことも強く意識した編集を心がけている。司書教諭資格取得のため勉強中の学生諸君ばかりでなく，すでに学校図書館で実務に携わっている方々，あるいはさらに司書教諭養成の立場にある方々にとっても，本シリーズが「理念的に考えてみる」ことのきっかけとなるよう願ってやまない。

2015年６月

監修者　朝比奈大作

序　文

本書は，「司書教諭テキストリーズⅡ」第２巻として，司書教諭養成課程科目「学校図書館メディアの構成」のテキストブックとして刊行するものである。シリーズ名に付されている「Ⅱ」からもわかるように，旧シリーズにおいて2002年に刊行した同タイトルの改訂版としての性質を有する。

ただし，「シリーズⅡ」では，監修者に加えて，本書以外の４巻の編者全員が交代している。したがって，この４巻においては，構成ならびに執筆・編集の観点も，旧シリーズのそれとは異なっている。それに対して，第２巻は，旧版と比べて編集方針における大きな相違がない。もちろん，旧版以降の時間の経過がもたらした学校図書館メディアに関する変容を，解説に反映させ，最新の状況として示している。しかし，「学校図書館メディアの構成」を捉える視点そのものに変化はないと判断し，章の組み立てや関係する事項の取り上げ方については，旧版を踏襲している。これは，同じ編者であることと無縁とは言えないが，それよりも，二つの事情によるところが大きい。

一つは，本書で扱う知識と技術の意義は共通していることである。「学校図書館メディアの構成」の位置づけは，本文２ページに示す，旧シリーズの概念図において示されている。すなわち，この科目は，学校図書館活動の基盤となる「情報資源」の形成にかかわる知識と技術を扱っている。確かに，この十数年において，メディアの種類が多様化し，増加し，また，複雑化している。しかし，そうした変化があるがゆえに，「情報資源」の形成の果たす役割はますます重要とされ，基本的な知識と技術を司書教諭が獲得することの必要性に揺らぎはない。

もう一つは，旧版を編集する際に，「学校図書館メディアの構成」の組み立てを詳細に検討し，その構造の精緻化を図ったことである。すなわち，この科目で扱う知識と技術を，学校図書館のテクニカルサービスの基礎技能とみなし，環境の変化にも対応できる，持続可能な「モデル（組み立て）」として提示す

ることを試みた。詳細は，『学校図書館メディアセンター論の構築に向けて』（日本図書館情報学会研究委員会編，勉誠出版，2005年）に寄せた拙文「学校図書館におけるテクニカルサービスモデルの構築」に記している。そこでは，この科目で扱う知識と技術を，図書館情報学の中の三分野（メディア基礎，メディアコレクション論，メディア組織法）に基づくものとしている。この組み立ては，現在でも通用すると判断され，本書の編集に際しても中核に据えた。

なお，旧版においても同様であるが，図書館情報学とともに教育学の知見に目を向けたことを，改めて強調しておきたい。すなわち，教育の一環として学校図書館が機能するという文脈を重視し，学校教育における図書館活動の位置づけが明確になるように記述することをねらいとしている。このねらいを活かすために，教育学の基盤に立ちながら，学校図書館を研究し，あるいは，学校図書館の実務に携わっている方に，本書の執筆をお願いした。これにより，学校図書館の理論と実践を，教育学と図書館情報学の重なりの中で追究することを目指した。

終わりに，こうした編集上の考え方に理解を示され，執筆内容に対して数々の貴重なご助言をいただいた監修者朝比奈大作先生に，心より感謝する次第である。また，刊行に向けて辛抱尽く見守っていただいた樹村房社長大塚栄一氏，編集担当の石村早紀氏に，お名前を記して御礼申し上げる。

2015年12月

編者　小田光宏

学校図書館メディアの構成

もくじ

監修者の言葉　iii

序文　v

第１章　学校図書館メディアの意義 ―――― *1*

１．学校教育とメディア …… *1*

（１）学校教育におけるメディアのはたらき　*1*

（２）メディアの発展　*3*

（３）学校図書館メディアの広がり　*5*

２．学校図書館メディアの視点 …… *6*

（１）教材としての学校図書館メディア　*6*

（２）読書材としての学校図書館メディア　*7*

（３）メディアの利用に関する能力　*9*

第２章　メディア構成の要点 ―――― *11*

１．メディア構成を行うための基礎理解 …… *11*

（１）構成プロセス　*11*

（２）構成の範囲　*13*

（３）構成の対象（コンテンツとツール）　*14*

（４）構成の時期　*15*

（５）構成に関する事務処理　*15*

２．メディア構成のための活動 …… *16*

（１）コレクション形成のための収集活動　*16*

（２）付加価値を高めるための組織化　*16*

（３）保存によるアクセスの保証　*17*

３．メディアの構成を考えるための視点 …… *18*

（1）所蔵とリモートアクセス　18
（2）図書館協力に基づく構成　19
（3）作成と編成　19
（4）メディア変換　20

第３章　メディア構成の知識と技術 ―――― 21
1．司書教諭に求められる能力 …… 21
（1）司書教諭の役割　21
（2）作業と認識　23
2．基礎知識の習得 …… 24
（1）メディアに関する基礎知識　24
（2）主題に関する基礎知識　28
3．本書で取り扱う知識と技術の全容 …… 30
（1）メディアとその収集に関する理解　30
（2）コレクション形成に関する理解　30
（3）メディアへのアクセスに関する理解　31
（4）メディアの組織化に関する理解　32

第４章　学校図書館メディアの種類 ―――― 33
1．印刷メディア …… 33
（1）図書　33
（2）レファレンスブック　35
（3）逐次刊行物　36
（4）その他のメディア　37
2．パッケージ系電子メディア …… 38
（1）CD-ROM（Compact Disk Read Only Memory）　39
（2）DVD（Digital Versatile Disk）　39
3．視聴覚メディア …… 40

（1）録音資料　40
（2）映像資料　41
4．ネットワーク系メディア……42
（1）メディアの特性　42
（2）ウェブページ（ホームページ）　44
（3）電子書籍　44
（4）電子メール　44
（5）その他　45
5．実物資料……45
6．特別な支援のためのメディア……46

第5章　印刷・視聴覚メディアの選択と収集――47
1．メディア選択に用いる印刷メディア……48
（1）図書を選択するための情報源　48
（2）雑誌を選択するための情報源　51
（3）その他のメディアを選択するための情報源　52
2．メディア選択に用いるネットワーク系メディア……52
（1）図書を選択するための情報源　53
（2）その他のメディアを選択するための情報源　55

第6章　電子メディア利用の環境整備――57
1．ネットワーク系メディア利用の環境整備……57
（1）ハードウェアの整備　57
（2）ソフトウェアの整備　62
2．視聴覚メディア利用の環境整備……65
（1）再生機器　65
（2）貸出に関する注意　66

第７章　コレクション形成の意義 ―――――――――――――――――――――――― *67*

１．コレクション形成の意義 …… *67*

（１）学校図書館の目的とコレクション　*67*

（２）コレクション形成に対する司書教諭の責務　*68*

（３）学校図書館の機能とコレクション　*69*

２．コレクション形成の視点 …… *70*

（１）コレクションの内容　*70*

（２）メディアの形態　*71*

（３）メディアの数量　*71*

（４）メディアの所管，配置　*72*

３．コレクション形成の方針 …… *73*

（１）自校の収集方針策定　*73*

（２）選択基準　*74*

（３）児童生徒の参加　*76*

第８章　コレクション形成の実際 ―――――――――――――――――――――――― *77*

１．コレクション形成の計画 …… *77*

（１）現状把握　*77*

（２）校内メディアの検討　*78*

（３）各教員との連携　*79*

（４）計画期間の設定　*79*

（５）図書館間ネットワーク等の活用　*80*

２．学習情報センターとしてのコレクション形成 …… *80*

（１）学習情報センターのコレクションの意義　*80*

（２）教科の学習と連携したコレクション　*80*

（３）探究型学習を支えるコレクション　*81*

（４）特別活動や課外活動に関連したコレクション　*82*

３．教材センターとしてのコレクション形成 …… *83*

（1）教材センターのコレクションの意義　83
（2）教材となるコレクション　83
（3）教材開発のためのコレクション　83
（4）分掌，学年，特別活動を支えるコレクション　84
4．読書センターとしてのコレクション形成 …… 84
（1）読書センターのコレクションの意義　84
（2）文学作品のコレクション　85
（3）楽しみのための読書を支援するコレクション　85
（4）教養を高める読書を支援するコレクション　86
5．受入作業 …… 86
（1）発注・見計らい・購読契約・利用契約　86
（2）会計上の扱い　87
（3）受入の種別　87
（4）検収　88
（5）原簿登録　88

第9章　コレクション評価の手法 ―――― 89
1．コレクションの評価と基準 …… 89
（1）評価の視点　89
（2）量的評価　90
（3）質的評価　90
2．メディアの更新 …… 92
（1）開架／閉架／配置換え　92
（2）形態的な基準に基づく更新　93
（3）内容的な基準や改訂・改版に基づく更新　94
（4）利用状況に基づく更新　95
（5）アクセスの確認と更新　96
3．廃棄 …… 97

（1）基準の策定　97
（2）除籍／廃棄の手順　98

第10章　メディアへの物理的アクセス支援 ―――― 99
1．物理的アクセス支援 …… 99
（1）排架法　99
（2）利用対象に応じた排架　100
（3）メディアの種別に応じた排架　100
（4）メディアの形態に応じた排架　102
（5）利用目的に応じた排架　102
2．ファイル資料 …… 103
（1）対象　103
（2）ファイリングの実際　104
3．電子メディア …… 106
（1）電子メディアの取り扱い　106
（2）メタデータの作成と共有　106
（3）著作権への配慮　107
4．他館メディアへの物理的アクセス支援 …… 108

第11章　メディアへの知的アクセス支援 ―――― 111
1．知的アクセス支援 …… 111
（1）支援ツールの種類　111
（2）所蔵目録　112
（3）記事索引　114
（4）パスファインダー　115
（5）読書リスト　117
2．OPAC の作成 …… 117
（1）コピーカタロギング　117

（2）総合目録と分担目録作業 119

第12章 分類法を用いたメディアの組織化 121
1．分類の意義と考え方 121
（1）分類の必要性 121
（2）分類の考え方 122
2．日本十進分類法の概要 123
（1）特色と構成 123
（2）記号法 124
（3）記号と概念の関係 126
3．分類作業の実際 127
（1）適用の方針と範囲の決定 127
（2）主題の把握と分類記号の決定 127
（3）分類規程の適用と分類記号の確認 129
（4）図書記号・別置記号・独自分類記号の付与 131

第13章 目録法を用いたメディアの組織化 133
1．目録の定義と種類 133
2．目録データの構成 134
（1）日本目録規則の概要 134
（2）書誌記述，標目指示，所在指示 135
（3）記述の構成と順序 135
（4）フィールドの設定 136
（5）エリア別の内容 137
（6）標目指示 140
（7）書誌階層 141
3．目録データの今後 142
（1）メタデータ 142

（2）MARC の活用　144

第14章　件名法を用いたメディアの組織化 ―――― 145

1．件名法の意義と考え方 …… 145

（1）主題アクセスの重要性　145

（2）統制語と自由語　146

（3）統制語彙表　147

（4）シソーラスの構造と機能　148

2．件名作業の実際 …… 150

（1）基本件名標目表の概要　150

（2）件名作業の手順　151

（3）件名規程　152

3．基本件名標目表以外の件名標目などの新しい動き …… 153

（1）『国立国会図書館件名標目表』　153

（2）「学習件名」の取り組み　155

（3）ソーシャルタギング　155

第15章　学校図書館メディアの構成における課題 ―――― 157

1．学校教育への貢献 …… 157

（1）読書活動の推進　157

（2）教育における ICT 活用　158

2．学校図書館担当者 …… 159

（1）メディア構成における司書教諭の役割　159

（2）学校司書との協同・役割分担　159

3．未解決の課題 …… 161

（1）司書教諭の配置　161

（2）メディア購入の財政措置　162

参考文献　*164*

資料１　学校図書館メディア基準　*165*
資料２　学校図書館図書標準　*170*
資料３　学校図書館図書廃棄規準　*172*

さくいん　*174*

［執筆分担］（執筆順）

小田光宏：第１章，第２章，第３章，第15章
高橋知尚：第４章，第５章，第６章
庭井史絵：第７章，第８章，第９章
村上泰子：第10章，第11章
今井福司：第12章，第13章，第14章

第1章
学校図書館メディアの意義

本書では，「学校図書館メディアの構成」について，大きく二つの面から取り上げることを意識している。ひとつは，学校図書館メディアそのものに目を向け，これを用いた学校教育活動に対する支援の様相に関する認識を深めていくことである。

もうひとつは，学校図書館において，多様な学校図書館メディアを扱うことができるように，実際的な知識と技術を身に付けることである。これは，学校図書館メディアの「構成」にかかわる知識と技術に相当し，認識しておくべき内容と必要に応じて実務を行える内容とに分けてとらえることになる。もちろん，その目的は，学校教育活動の支援にあることを忘れてはならない。

この章では，学校図書館メディアの意義について触れるとともに，それを取り扱う際の基礎となる視点を説明する。

1．学校教育とメディア

（1）学校教育におけるメディアのはたらき

図1－1を見てほしい。これは，司書教諭養成のための内容（科目）が，相互にどのように関係しているかを描いた概念図（構成図）である。この図で「学校図書館メディアの構成」は，学校における情報資源を構築する役割を担うものと考えられており，学校図書館運営の基盤に位置づけけられている。したがって，本書で取り扱う知識と技術は，他の科目で取り扱う内容を支えるも

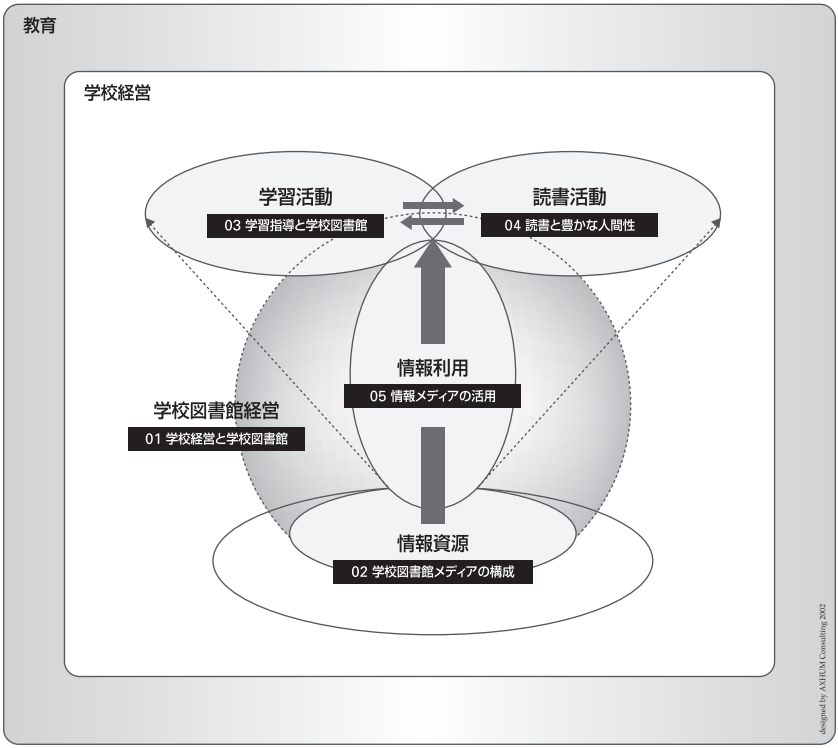

図１－１　司書教諭養成科目構成図
（出典：古賀節子編『学校経営と学校図書館』樹村房，2002．前見返しより）

のとなっている。

各巻の関係を個別に指摘すれば，まず，「学校図書館経営」（学校経営と学校図書館）は，情報資源に立脚して行われることになる。次に，情報資源を具体的に活用するためには，多様なスキルが求められ，とりわけ現代では，ウェブのネットワーク資源を多用することになる。すなわち，「情報利用」（情報メディアの活用）の内容が，本書で取り扱う基盤の上に展開されるものとして位置づけられている。そして，学校図書館メディアが活用される状況として，「学習活動」（学習指導と学校図書館）と「読書活動」（読書と豊かな人間性）とが強調されているのである。

なお，ここで学習活動と読書活動は，基本的には学習者である児童生徒の行動として理解されるが，それを指導する教員の存在を忘れてはならない。すなわち，学校図書館メディアは，学習者の種々の活動を支援する基盤であると同時に，学習者のそうした活動を指導する教員の活動をも支援する基盤になっているのである。言い換えれば，学校図書館メディアは，学習や読書のためのメディアであるとともに，学習指導や読書指導のためのメディアでもあることになる。

（2）メディアの発展

今日，私たちの周りには，各種のメディアが存在する。それらの広がりについて理解するためには，メディアそのものの概要と発展の経緯を認識しておくことが求められる。ただし，関係するさまざまなことがらに対するとらえ方の違いが存在し，一義的に理解できない状況が長年にわたって続いていることを承知しておかなくてはならない。

まず，メディアに関する歴史を振り返ると，情報伝達のコミュニケーションにおいて，その情報を伝達するための「媒体」または「経路（チャネル）」であると理解するのが，「メディア論」において一般的であった。ここで情報とは，伝達の対象となる内容（コンテンツ）であり，人間の感覚で受けとめることのできるすべてのものを指している。また，コミュニケーションである以上，そこには発信者と受信者が存在することを前提としている。すなわち，情報を伝えようとする者から，情報を受け取ろうとする者に対して，情報を受け渡す際の道具となるものが，メディアなのである。

次に，メディアの特性を理解するためには，一定の観点に基づいて，メディアを類別し，それぞれに収められる個別のタイプを想定するとよい。たとえば，以下のような観点に基づいて，類別がなされてきた。

①搬送形態

②素材

③記録形式

④表現形式

⑤送受信形態

⑥伝達方向

⑦送受信関係

①は，情報が伝達される際に用いられる道具の形態に基づく類別であり，三つのタイプが想定される。ひとつは，情報を何らかの媒体に記録し，その媒体そのものを搬送するものである。この媒体は，情報を収める容器であることから，パッケージ系メディアというよび方がしばしばなされる。これに対し，特定の電波や回線を用いて情報を伝達するしくみのことを，通信系メディアとよんで対比することが多い。こうした電波や回線は，通信上の「経路（チャネル）」とよばれるものに相当する。通信系メディアは，この経路が無線である場合と有線である場合とに，さらに二分することができる。今日のインターネットも，原理的には通信系メディアに相当するが，コンピュータネットワーク上で情報を伝達するしくみと理解されていることから，ネットワーク系メディアとよんで区別することもある。第三のタイプは，講演会やコンサートといった，情報伝達の機会や場（空間）をメディアとしてとらえる場合であり，空間系メディアというよび方もある。

②は，主にパッケージ系メディアを細分する観点である。すなわち，紙やフィルム，音響テープや画像テープ，音響ディスク，磁気ディスクや磁気テープ，光学式記録ディスクといった分け方になる。

③は，情報がコンピュータの信号に変換されて記録されたものであるかどうかに基づく類別で，アナログ方式によって記録するメディアと，デジタル方式によって記録するメディアとに分かれる。電子メディアとよばれているものは，後者になる。

④は，情報の表現形式によるものであり，一般的には，文字（記号，数値を含む）によるもの，音声によるもの，画像によるものとなる。画像によるものは，さらに静止画の場合と動画の場合とに分かれる。なお，こうした分け方とは別に，物そのものをメディアとして扱うこともある。これは，実物メディア

というとらえ方であり，学校教育において用いられる「標本」や「模型」などが，これに相当すると考えられている。

⑤は，送信ならびに受信の形態に基づく類別であり，とりわけ，機械や装置の存在の要不要が焦点となる。通信系メディアの場合には，送信ならびに受信の双方に，装置が必要になる。すなわち，発信者の保持する文字，音声，画像といった情報を，経路上で処理できる信号に変換するためには，送信装置が必要とされる。また，受信者が経路上の信号を，文字，音声，画像に変換し直すためには，受信装置（再生装置）が求められるのである。

⑥は，情報の伝達方向が，一方向か双方向かによる分け方である。送信者と受信者が常に固定されている場合は，用いられるメディアの伝達方向は一方向となる。これに対し，両者がその都度交代してコミュニケーションがなされる場合は，双方向の伝達を可能にするメディアが用いられることになる。

⑦は，送受信の主体の関係が，一対一であるか，一対多であるか，多対多であるかといった類別である。一対一の送受信関係は，一般的にはパーソナルコミュニケーションと位置づけられ，一対多の送受信関係は，マスコミュニケーションとなる。インターネット上では，チャットやSNSのように，多対多の送受信を可能にするメディアも存在する。

なお，①から⑦のいずれかひとつだけを用いて，個別のメディアの性格を明確にすることは難しい。たとえば，音楽CDは，パッケージ系メディア，デジタル方式による記録，音声による表現といった特性を有している。また，電子書籍は文字による表現がなされている点は同じでも，搬送形態は一様ではなく，インターネットを用いて配信されるものもあれば，パッケージに収められて受け渡されるものもある。

（3）学校図書館メディアの広がり

前項で確認したように，多様なメディアが存在する。これらの中で，学校図書館は，どのようなメディアを扱うのであろうか。

学校図書館で扱われるメディアのひとつは，伝統的に「図書館資料」とよば

れてきたものである。このメディアの基本は，パッケージ系メディアである。具体的には，図書や雑誌・新聞といったメディアであり，印刷によって，主に文字情報を紙に記録したものである。また，音楽 CD のように音声を記録したもの，DVD や写真のように画像を記録したものも，パッケージ系メディアであり，形態は変遷しているものの「図書館資料」として扱われてきた。

もうひとつは，インターネット上で扱うメディアであり，ウェブはその代表である。今日では，学校教育において，ウェブを活用することは学習において必須となっている。それゆえ，学校教育活動を支援する役割を担う学校図書館では，ウェブを学校図書館メディアの一部として位置づけ，その利用に関係する活動を展開することが求められている。

２．学校図書館メディアの視点

（1）教材としての学校図書館メディア

学校図書館は学校教育の施設であることから，学校図書館メディアもまた，学校教育を成り立たせるための要素のひとつと認識することになる。一般に教育という行為・現象には，「教育者（教える人）」と「学習者（学ぶ人）」が存在するとともに，「教育内容」という第三の要素がそこに位置づけられる。教育内容は，教育活動における「教材」として位置づけられ，これを介して，教育者と学習者の関係が成り立っている。または，学習者が自律的に教材を活用して学習する。

学校教育において教材と言うと，まずは「教科書」が意識され，それと併せて「補助教材」とよばれるもの，たとえば，計算ドリルや資料集などが思い浮かぶであろう。しかし，「教科書」は，教育という行為によって主に次世代に伝えるべき知識や技術のダイジェストに過ぎない。人間がその歴史において発見し，経験し，創造してきた英知を再構成して提示したものではあるが，その膨大な智慧に比べれば氷山の一角である。もとより教科書とは，森羅万象の知識の中から，重要かつ標準的なものを抜粋し，要約したものにほかならず，オ

リジナルの知識は，教科書とは別に存在するのである。

そうしたオリジナルの知識は，歴史的には，図書に代表される印刷メディアに記録されて現代に至っている。その上で，記録された内容のデジタル化が促進され，それまでとは異なるメディアを介しての利用も可能になっているのが，今日の様相である。また，Facebook，Twitter，ブログといったSNSの普及により，さまざまな知識や技術がオープンなものとなり，かつ，人々の経験知と融合して示される場が出現していることも，教材について検討する際に，意識しておかなくてはならない。

今日，学校教育活動は，教科書をよりどころとしながらも，それだけにとらわれない幅広い「知」の世界へ学習者を誘うものとなることが期待されている。こうした「知」の世界が示されているメディアは，学習者にとってすべて教材として位置づけられることになる。それゆえ，教材としての意義を有する幅広いメディアを整備し，あるいは，教材としてのメディアに辿り着くための環境を整え，かつ，適切な支援を行うことは，学校図書館の重要な責務なのである。

（2）読書材としての学校図書館メディア

学校図書館から連想されることがらの中で，「読書」がその上位にあることは，ほぼまちがいないであろう。学校図書館のコレクションといえば，「読書のための資料を用意する」と同義と考えられ，司書教諭の第一の役割は「読書指導」にあるといった言説も見受けられる。確かに，学校図書館は，児童生徒の読書を促進させる大切な場であるが，それだけにとどまるものではないことを確認しておきたい。この確認をした上で，学校図書館が取り扱うメディアが，読書材として機能することを認識することが求められる。

児童生徒の読書離れ，活字離れは，長年にわたる学校教育の解決課題であり，読書離れが児童生徒のさまざまな行動に，マイナスの影響を与えているのではないかという懸念すら示されている。読書が生活上果たす効用や人格形成に与える影響については，本シリーズ第４巻『読書と豊かな人間性』で扱われる内容である。一方，本書において主張できることは，学校図書館は，読書材とし

［シリーズ監修者］

朝比奈大作（あさひ なだいさく）　放送大学客員教授
前横浜市立大学教授

［編集者・執筆者］

小田光宏（おだ・みつひろ）

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学
現在　青山学院大学教育人間科学部教授
主著　『情報サービス論』（編著）日本図書館協会，2012

［執筆者］

今井福司（いまい・ふくじ）

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学，博士（教育学）（東京大学）
現在　白百合女子大学基礎教育センター准教授
主著　「アメリカ公立学校カリキュラム改革における学校図書館―1920年代から1940年代までの改革と日本占領期における受容―」『日本図書館情報学会誌』（第58巻第３号）日本図書館情報学会，2012

庭井史絵（にわい・ふみえ）

慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻修了
現在　慶應義塾普通部司書教諭
主著　『中学生・高校生のための探究学習スキルワーク』（共著）全国学校図書館協議会，2012

高橋知尚（たかはし・ともひさ）

青山学院大学文学部卒業
現在　國學院大學久我山中学高等学校司書教諭
主著　『学校図書館メディアの選びかた』（はじめよう学校図書館２）全国学校図書館協議会，2012

村上泰子（むらかみ・やすこ）

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学
現在　関西大学文学部総合人文学科教授
主著　『Web 授業の創造』（共著）関西大学出版部，2000

司書教諭テキストシリーズⅡ…2
学校図書館メディアの構成

2016年２月４日　初版第１刷発行
2018年３月16日　初版第３刷

〈検印省略〉

著　　者 ©　小田光宏
今井福司
高橋知尚
庭井史絵
村上泰子

発行者　大塚栄一

発行所　株式会社 樹村房
JUSONBO
〒112-0002
東京都文京区小石川5-11-7
電　話　03-3868-7321
ＦＡＸ　03-6801-5202
振　替　00190-3-93169
http://www.jusonbo.co.jp/

印刷　亜細亜印刷株式会社
製本　有限会社愛千製本所

ISBN978-4-88367-252-3　乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。

朝比奈大作　監修　　**司書教諭テキストシリーズⅡ**

［全５巻］
各巻Ａ５判　本体2,000円（税別）

▶本シリーズは，刊行後十余年を経過した「司書教諭テキストシリーズ」（全５巻）の改訂版にあたる。最新の図書館情報学の知見を教育学的視点から解説し理論と実践の融合を図るという方針を踏襲しながら，学校図書館を取り巻く急激な状況の変化に対応。全巻を通じ，修得した知識・技術を教育現場の中でいかに活用していくかという視点を強く意識しつつ編集を行った。

1 学校経営と学校図書館　編集 中村百合子
2 学校図書館メディアの構成　編集 小田 光宏
3 学習指導と学校図書館　編集 齋藤 泰則
4 読書と豊かな人間性　編集 杉本　卓
5 情報メディアの活用　編集 村山　功

樹村房